

【東京大学現代韓国研究センター(CCKS) 特別研究会プログラム】

【テーマ】「新たな視点で考える在日コリアン」

【日 時】2014年2月1日(土) 13:00~17:30

【会 場】東京大学 福武ホール地下2階「ラーニングスタジオ3」(本郷キャンパス)

【司 会】外村大(東京大学准教授 現代韓国研究センター)

【報 告】李洪章(日本学術振興会 特別研究員)

「在日朝鮮人のエスニシティ研究の動向と展望」

福本拓(宮崎産業経営大 専任講師)

「日本の都市における在日朝鮮人集住地区の存続とそのプレゼンス」

田中里奈(山口福祉文化大学 専任講師)

「在韓『在日コリアン』の日本語教師のライフストーリー

: 日本語教育における『言語』、『国籍』、『血統』」

【言 語】日本語

# 在日朝鮮人のエスニシティ研究の動向と展望

日本学術振興会特別研究員（上智大学）

李 洪章

## 1. 報告の目的

- ・ 在日朝鮮人のエスニシティ研究の動向について解説し、報告者による研究の位置付けを明確にしたうえで、研究の一部を紹介する。
- ・ 在日朝鮮人のエスニシティ研究が現在抱えている課題と今後の展望に言及する。

## 2. 在日朝鮮人のエスニシティ研究の潮流

- ・ ～80年代

在日朝鮮人の生活と意識の現状に関する研究は、「研究者の意図にかかわらずイデオロギー対立の文脈で把握される傾向」があり、「ひとたび南北いずれかの立場に加担する研究だとみなされると、他方の勢力から政治的な圧力が加えられるという状況が散見され」（福岡・金明秀 1997:1）た。

→アイデンティティ・ポリティクス、民族本質主義

- ・ 第一の潮流→多様化論

福岡安則（1993）『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ』（中公新書）

→異化と同化を極として設定し、その間のグラデーションを描き出す

→本質主義に対する根本的な批判にはならず

- ・ 第二の潮流→反本質主義

鄭暎恵

民族本質主義→女性の抑圧、女性による自己犠牲を内包。「純血性」の神話のもとでの「ダブル」の排除・周縁化

→現実批判にはならず

在日朝鮮人社会が内包する民族本質主義を認識論レベルで批判するだけでは不十分

- ・ 第三の潮流? → 先祖返りとしての反・反本質主義ではなく・・・

在日朝鮮人個人によって語られる「民族」や、在日朝鮮人をめぐるミクロなコミュニケーションのあり様への着目。

橋本みゆき「国際結婚」研究、倉石一郎「パラムの会」研究、山口健一「パラムせんだい」研究、徐阿貴「夜間中学」研究・・・

- ・ 在日朝鮮人個人（特にマイノリティ・イン・マイノリティ）による生活と意識に関する語りの掬い上げ
- ・ 在日朝鮮人をめぐるカテゴリーに依拠しないコミュニケーションの可能性への言及
- ・ 在日朝鮮人運動の有機的変革に対する提言

### 3. 民族経験の記述にむけて

2つの大きな課題

#### ① 多様性／個人への着目による「民族性」の捨象。

- ・ 前提として

在日朝鮮人は「想像上の故郷」としての朝鮮半島に郷愁や愛着を持つためにではなく、逆に、「想像」としては帰属意識をあまり持ち得ないにもかかわらず、朝鮮半島の政治的現実によって日常の生を拘束されているからこそ、自己解放の条件から「本国」という要素を外すことができないのだ。つまり民族的「想像」ではなく、民族的「現実」が国境を超えているのである。（徐 2002:173）

- ・ 民族的現実とは現代日本社会において、どのように在日朝鮮人の生活に影響を及ぼしているのか

Y: 例えばどっかで、悪口じゃないけど、「韓国ってどうよなー」とか言うてるのを聞いても、自分に向けて言ってるわけではないし、別に悪気があるわけじゃないし。見たら分かるじゃないですか。で、ここは日本やし、日本学校やし。まあ、そういうのは聞き流したりとか、「仕方ないかなー」っていうところもありますね。ニュースとか、ああいう風に取り上げたりしてたら、影響されるのもその子らのせいではなく、メディアが悪いというか。

→ 北朝鮮バッシングや嫌韓現象が具体的かつ直接的な差別として顕在化しなくても、自らが差別される存在であることを自覚せざるをえない。

→ 「生きづらさ」

→「社会の在り方それ自体を問題化する契機が含まれて」おらず、「努力の限界において破たん」（草柳 2004:115）しうる不安定なものである

（個人が「生きづらさ」について語ることは）『私』を超える回路へと個々人を相互に開くものとなりうる」（草柳 2004:118）

→民族的現実の詳細な記述の必要性

#### ② カテゴリー化の暴力を批判しながら、いかに共同性を構築していくのか。

金泰泳『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』

→（タイトルのようなコンセプトはさておき）在日朝鮮人／日本人という二者択一的なカテゴリー化の暴力に対し、在日朝鮮人個人がいかにふるまうのかを明らかにした。

→宋順子…「子ども会」で触発され、中学生の頃に「本名宣言」したが、会のシンボルとして扱われることを窮屈に思うようになり、高校入学と同時に再度日本名を使用。それでもなお、「在日朝鮮人であることを周囲に隠している自分の姿」（金泰泳 1999:186）を卑屈に思い、「在日朝鮮人の高校生の部会」への参加を継続。

→日本名の使用は単純な「同化」ではなく、オルタナティブな民族観の構築。

同化を助長する議論だという批判

⇔「柔軟なアイデンティティは何らかの形でなお有効であるはず」

在日朝鮮人社会が抱える課題

→こうした語りを許容し内包しうる共同性の在り方に関する議論に寄与

#### 4. ダブルの「加害と被害」をめぐる語り

・在日朝鮮人社会は長きに渡り、日本の植民地主義をめぐる被害性をその共同性の基軸に据えてきた。

・日本人／在日朝鮮人のカテゴリー分けの根拠になってきたのは、「血統性」。

→在日朝鮮人社会は「ダブル」に対して、一貫して「被害者」として振る舞うことを要請（「ダブル」はあくまでも「在日朝鮮人」としての文化的・政治的背景を有しているのであり、その意味では被害性を共有することが可能、という論理）

→基本的に「血の論理」に依拠する加害と被害の二元論は、「被害者としての在日朝鮮人」というカテゴリーを維持するために「日本人」に対して「加害性」を投影することによって成立。

・「ダブル」の語りをどう読むのか

被害性のみで依拠することのできない「ダブル」は、果たして自らと歴史との接点をどのように見出し、理解しようとするのか。

→「被害の歴史」に依拠することなく、「民族的現実」を乗り越えていくための共同性を生み出していくうえでのヒント

安田直人氏

父：日本籍在日朝鮮人 母：日本人

・父は教会の牧師になるにあたって日本籍を取得。結婚するまで妻に在日朝鮮人であることを隠していた。

・母は安保闘争や労働運動に参加。家庭内における民族教育にも熱心。

→幼い頃に離婚、母に育てられる。→「在日朝鮮人」であることを自然と自覚。

【や一：差別と被差別のはざままで】

安：高校時代に、重要な出会いがあった。私のクラスにひとり、在日朝鮮人がいたんです。〇〇君という子でしたけれども、かれが朴君という本名を持つ、民族名を持つ在日朝鮮人だということがわかった。かれが原付の免許を取ってそこに民族名が載っていた。そこでかれに対するいじめが始まったんです。成績の悪い、クラスを横断して二十人くらいのグループがあって、私もそのメンバーで、〇〇君もそのメンバーでした。いつもはいっしょに遊びまわってる。パチンコ屋行ったり、麻雀屋に行ったりするわけです。僕も麻雀好きで、かれも好きでしたが、ところが、かれが弱かった。すぐ鳴くんですね。ポンとかチーとかカンとか。緊張した場面で何回も鳴かれるとみんな嫌になりますけれども、それで、とにかくカンばかりするんで、かれがカンすると、そこでいじめが始まる。「韓国人がカンした。」それが一言始まったら、「こいつは韓国人だから」という話がダーっと出てくるんです。そこで、私がどういうふうにいるか。ドキドキしてるんです。心の中で、「自分も朝鮮人の血が半分流れているんだ」と、「だからそんなふうにいじめちゃいけないんだ」と言いたい。それなのにもう一方の心の中に、「もしそれを言ったら、自分もいじめられる」。…この体験は、僕にとって、いじめや差別を考える上で基本的なことです。こ

れが僕の差別を考える時の基盤です。(i)

- ・差別・被差別関係はけっして生来的に固定されたものではなく、あくまで関係的なもの
- ・加害／被害をめぐる葛藤のきっかけ

【や二：「差別をする側としない側で人間を割ることはできない」】

安：不思議なことに、運動のなかで私が朝鮮人の血を引いているということが言えるようになったのは、およそ三年後です。私自身はその時のことを振り返って、自分自身のなかにも弱さが決定的にあったと思いますけれども、運動ということのなかにそういう人間を許容していく、あるいは人間が心を開いて話をする状況を作り出す余地がほとんどなかったというふうにも思っています。ようやくその三年間を経て、自分が先輩のところに行って、「今までこういう活動をしてきたのは、自分が帰化をした朝鮮人を父親に持つ存在で、自分のなかにある朝鮮人っていう問題を考えたかったからだ、自分のアイデンティティという問題を考えたかったからだ」と言うと、その先輩は「うーん、そうだったのか」。抑圧者としての日本人と被抑圧者としての在日朝鮮人。「どっちだろうか」。結局、ここで私自身は、差別するかしないかというふうに、差別をする側としない側で人間を割る、人間を切っていくあり方に関しては、ここで非常に大きな疑問を抱くようになりました。学生運動の世界からは逃げることになりましたが。(ii)

- ・運動の世界における「抑圧か被抑圧か」の二項対立的発想→「ダブル」の居場所は？
  - 差別者と被差別者というカテゴリーで区切ること自体が不毛
  - 「人は一貫して加害者であり被害者でもある」という認識に至る。

【や三：「罪責」】

安：ただ、罪責の問題になると、ちょっと話がややこしくなってきた…その一、まあ、加害・被害の問題でもいいんだけど、罪責の問題になると話がややこしくなってきた。僕は、神学校を卒業するときに論文を書いたんですけども、その一、卒業論文のテーマに取り上げたのが、私が属している教会が日本キリスト改革派教会っていうんですけども、日本キリスト改革派教会の前身になっていた教会があって、日本キリスト教会なんですね。その一、日本キリスト教会が、昭和14年のことなんですけども、在日朝鮮人教会を併合するんです。(中略) その問題を取り上げて僕が示したかったのは、その日本の教会が戦時中何をしたのかということ、少しでも明らかにしたかったということで。で、その責任を今の教会も引き継いでいるということを示したかったわけなんですけども、で、そういう意味で、

僕が属している様々な団体が、えー、その植民地朝鮮に対して加害責任を負っているという問題は認めざるを得ないですね。で、一方で、これも複雑な問題なんですけど、一方でね、その僕の祖母は、非常に熱心なクリスチャンで、その当時の日本、あ、その当時の在日朝鮮人教会に属していたんです。つまり僕の、血の中には、両方があるわけですよ。(中略)「加害・被害」が重なっているというケースだろうと思うんですね。

・加害と被害は個人の内面に複雑に積み重なっている。

「罪責」…聖書の原罪論<sup>(iii)</sup>に基づき、自分自身が犯した罪のみならず、たとえば上の世代が戦争において犯した直接的な加害行為に対する負い目は引き継がれ、あるいは日本社会に「罪意識を植えつける働きをして来なかった責任」が、個人の罪責として問われる(渡辺 1997:276-8)。

教会の牧師としての加害性のみならず、クリスチャンであった祖母が負った被害をも、罪責という次元で捉えていく。

・郭基煥

『代弁者』以外の他の在日」が「客体化されてしまう」ことを避け、「在日について語りつつなおも在日を『主体化』する方法」は、「語りの宛先人に在日を指定する以外にない」。そうすることで、在日朝鮮人は自らに、「なぜ在日がこの問題（在日問題）を克服し得なかったか」と問い、さらには「なぜ在日は日本人がこの問題を解決させることができなかったのか」と問うことになる。このような態度をとるとき、在日朝鮮人は、過去の苦痛が回帰することに恐怖するのではなく、それに対して「自分が何もすることができないという絶望」を感じるようになる。その感覚は、「ときに私の現在の生に対する正当性の感覚を奪い、自らの生が特権的な位置にあることへの自覚を促す。そして、それを自覚した者は、「私と同じ時を生きる他者の苦痛を苦しむ」ことへと促される。それゆえ、在日朝鮮人どうしが、「受難の歴史が遠すぎることへの悲しみ」に基づいてつながろうとするとき、そのつながりは、原理的に「閉じた共同体にやすらうことはない」(郭 2006:223-8)。

→「パラムの会」へ

唯一の活動方針「どんなにややこしくても一つの言葉に収斂させ」ることなく、メンバーの「叙事的自己表現」(自分史語り)と向き合う。

→他者を己のリアリティの範疇で産出し、自己の存在に正当性を与えようとする行為に

向かうことを拒否し、親密でありながらも、自己と他者とのあいだの共約不可能性を常に意識しながら、「公共的領域」を生み出そうとする実践。

## 5. 今後の課題

・在日朝鮮人の民族経験に関する記述の蓄積

→方法論の成熟

・60～80年代の運動の再照射

パラムの会はなぜ「失敗」したのか

→「運動をしてしまったことが問題だった」

→全朝教、本名を呼び名乗る運動との関係

## 参考文献

鄭暎惠 2003 『〈民が代〉 齊唱』、岩波書店

福岡安則 1993 『在日韓国・朝鮮人』、中公新書

橋本みゆき 2010 『在日韓国・朝鮮人の親密圏』 社会評論社

郭基煥 2006 『差別と抵抗の現象学』 新泉社

金泰泳 1999 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて——在日朝鮮人のエスニシティ』  
世界思想社

倉石一郎 2006 『差別と日常の経験社会学——解読する〈私〉の研究誌』 生活書院

渡辺信夫 1997 『今、教会を考える——教会の本質と罪責のはざままで』 新教出版社

山口健一 2011 「在日朝鮮人—日本人間の〈親密な公共圏〉形成——『パラムせんだい』における『対話』の成立条件検討を通じて——」,山口健一編著『GCOE Working Papers 次世代研究 51 在日朝鮮人／在韓中国朝鮮族社会における親密圏・公共圏の変容』 京都大学グローバル COE プログラム 親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点,84-101.

パラムの会編 『風の便り』 第二号

---

(i) 「パラムの会」機関紙 第二号（2000年1月発刊）掲載の手記より引用。

(ii) 「パラムの会」機関紙 第二号（2000年1月発刊）掲載の手記より引用。

(iii) 旧約聖書の創世記においてアダムとイブが神の言葉に従わずに犯した罪を指し、その子孫たる人間は常に罪を犯す存在であるとする考え方。



---

# 日本の都市における在日コリアン 集住地区の存続とそのプレゼンス

東京大学現代韓国研究センター(CCKS) 特別研究会プログラム  
「新たな視点で考える在日コリアン」

2014/02/01

福本 拓 (宮崎産業経営大学)

---

# 都市空間における在日コリアンのプレゼンス





# 国際人口移動と都市

---

## ▶ 近代都市の発展と空間的拡大

- ▶ 都市外からの人口増
- ▶ 国境を越えた移民の増加
- ▶ 資本主義下での空間編成

## ▶ 日本の近代都市

- ▶ 都市一周縁間の人口移動
  - ▶ 「周縁」：日本の地方，植民地
-



# 在日コリアン集住地区

---

- ▶ 集団内・集団間関係の発露
  - ▶ 労働力再生産の場として
    - ▶ 公的な（非）介入
  - ▶ 集住地区に関わる二つの側面
    - ① 管理・排除／抵抗のポリティクスが展開する場として
    - ② 自助・生活拠点の場として
-

# ① 管理・排除 ⇔ 抵抗

- ▶ 例) 第二次世界大戦後のバラック撤去  
(スラムクリアランス) 本岡(2007)
- ▶ 居住不適エリアへの在日の集中  
(集合的消費へのアクセス制限)
- ▶ 行政による排除とそれに対する抵抗
- ▶ 排除の背景

## ② 自助・生活拠点の場

---

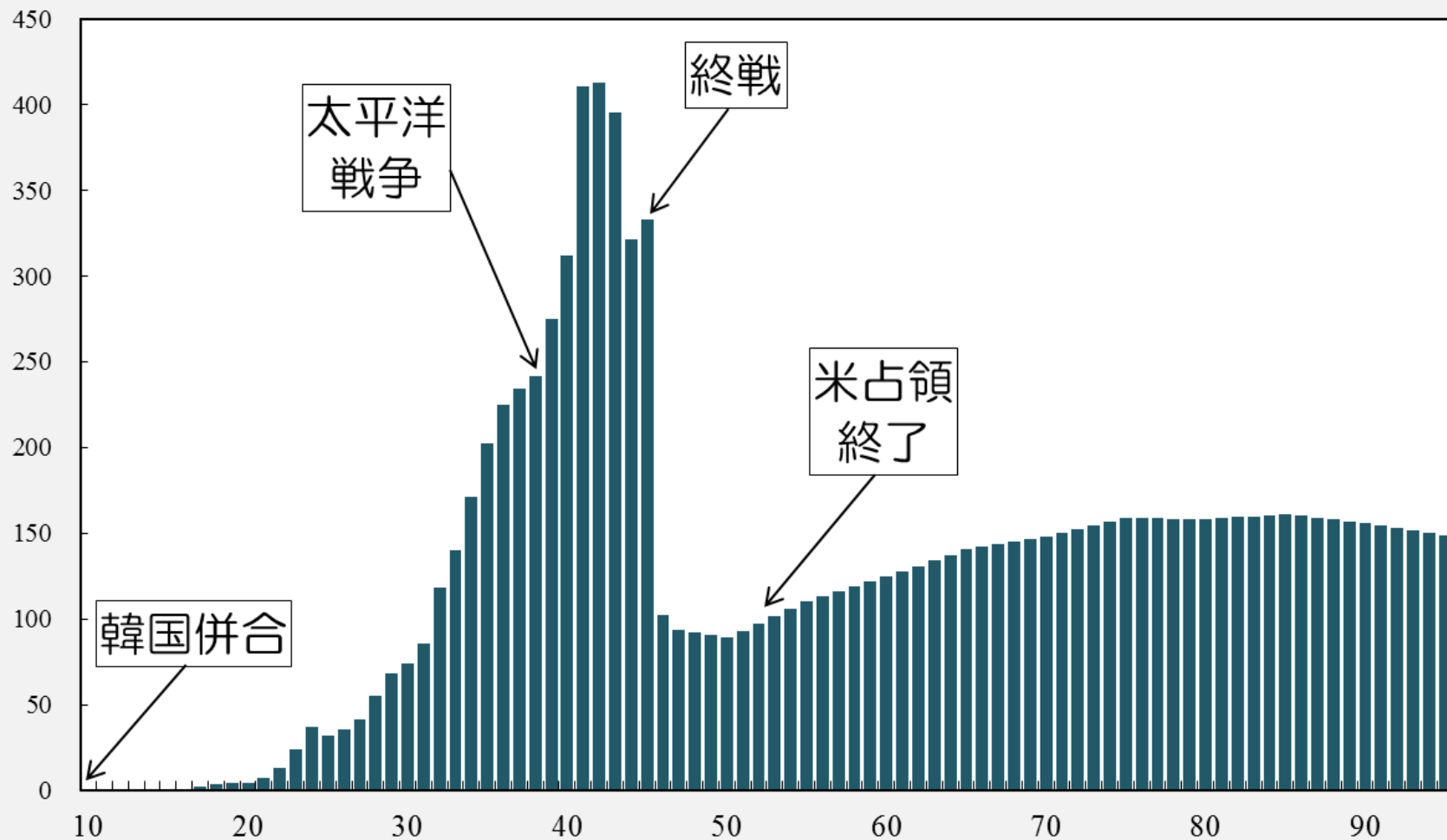
- ▶ (いわゆる) コミュニティの存在
  - ▶ コミュニティ内部の資源
    - ▶ 民族団体, 民族学校, 民族金融機関
  - ▶ コミュニティ内部の社会関係資本
    - ▶ 資金融通, 生活相互扶助
  - ▶ コミュニティの経済的基盤
    - ▶ 在日コリアンの自営業者
  - ▶ 日本社会との接点
-

# 本発表の目的

---

- ▶ **研究対象：大阪市生野区**
    - ▶ 日本で最大の在日コリアン集住地区
    - ▶ 現在でも明瞭な集住地区が存在  
(人口面でも)
  - ▶ **集住地区の存続過程への着目**
    - ▶ なぜ現在まで残ったのか？
    - ▶ コミュニティの機能，在日コリアンの就業との関係性について検討
-

# 大阪の「在日」

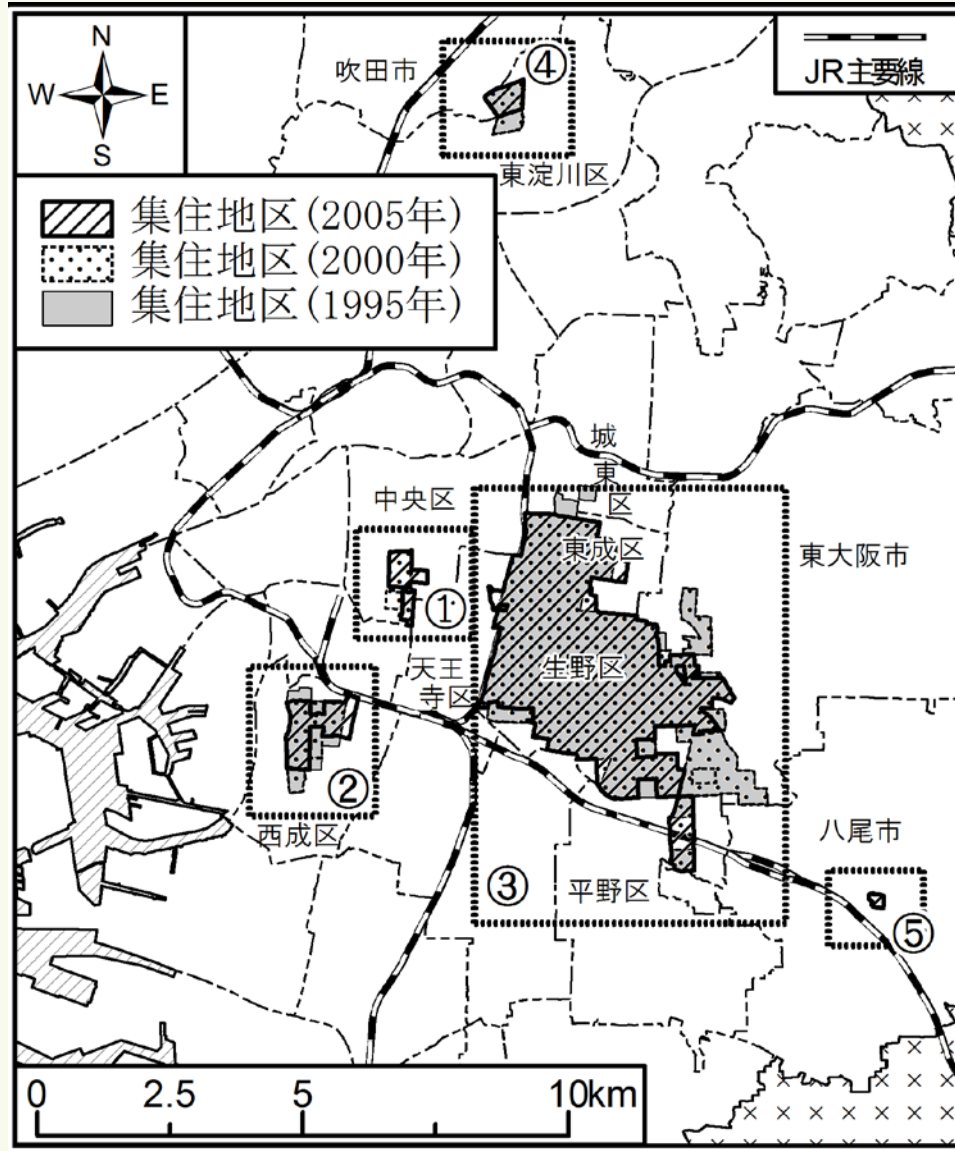




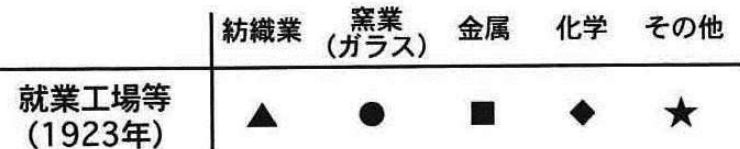
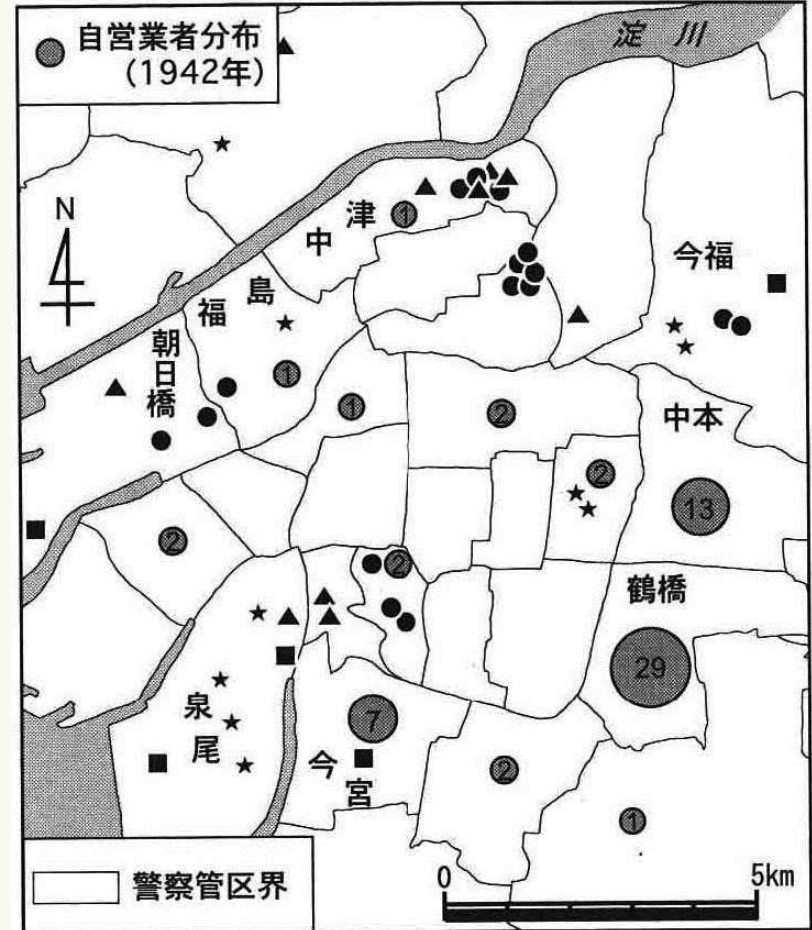
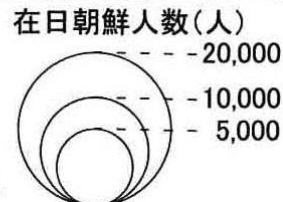
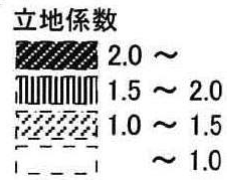
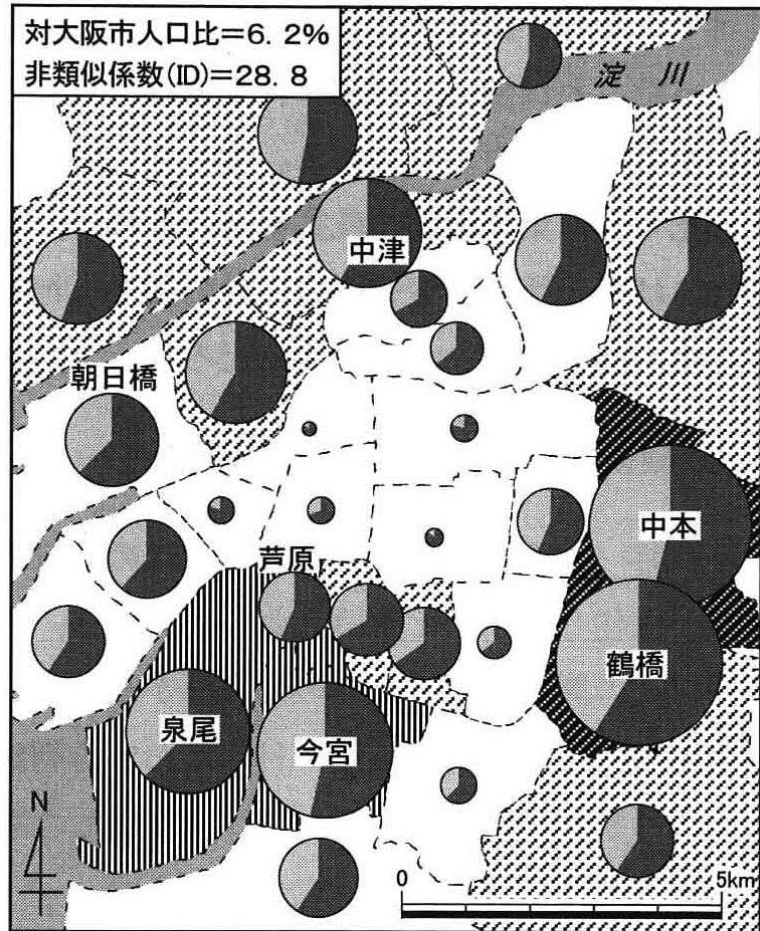
# 大阪の在日コリアン



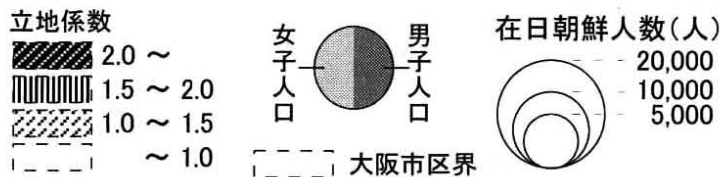
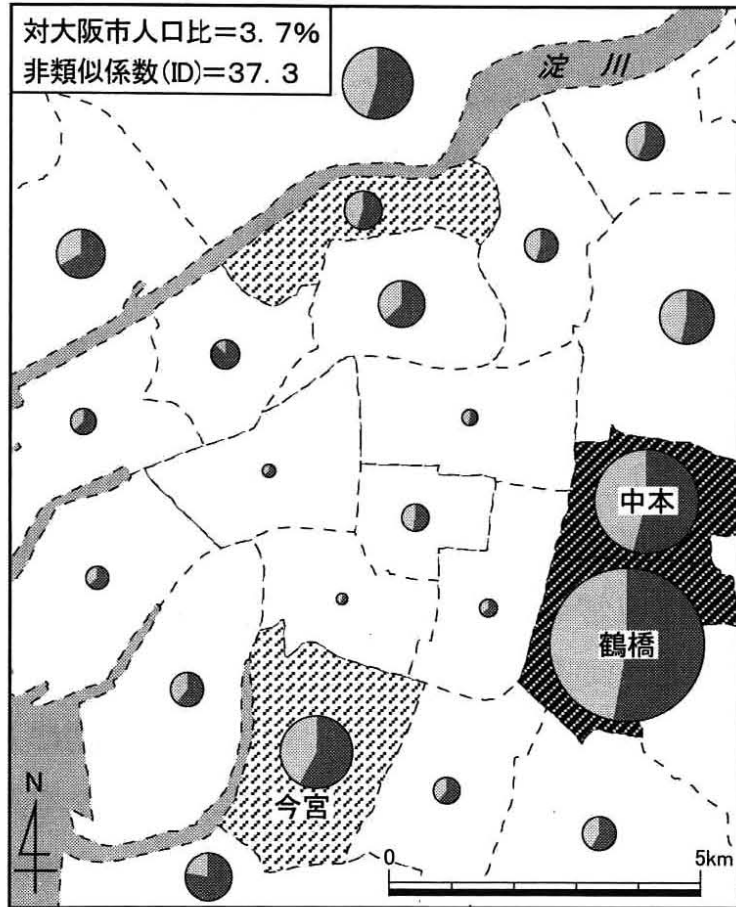
# 現在の在日コリアンの分布



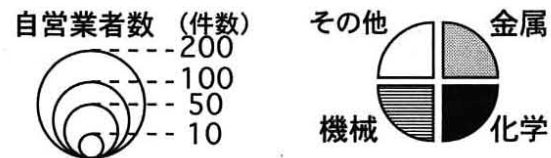
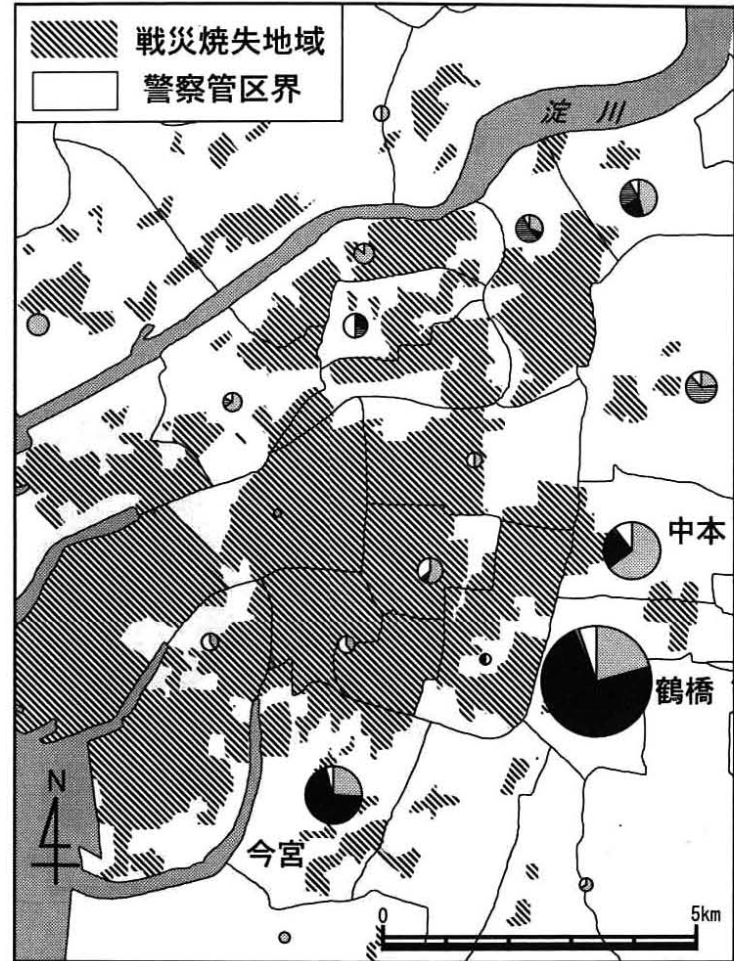
# 戦前的大阪における在日コリアンの分布



# 終戦後，急変した在日コリアンの分布



第7図 在日朝鮮人の分布と立地係数 (1947年)

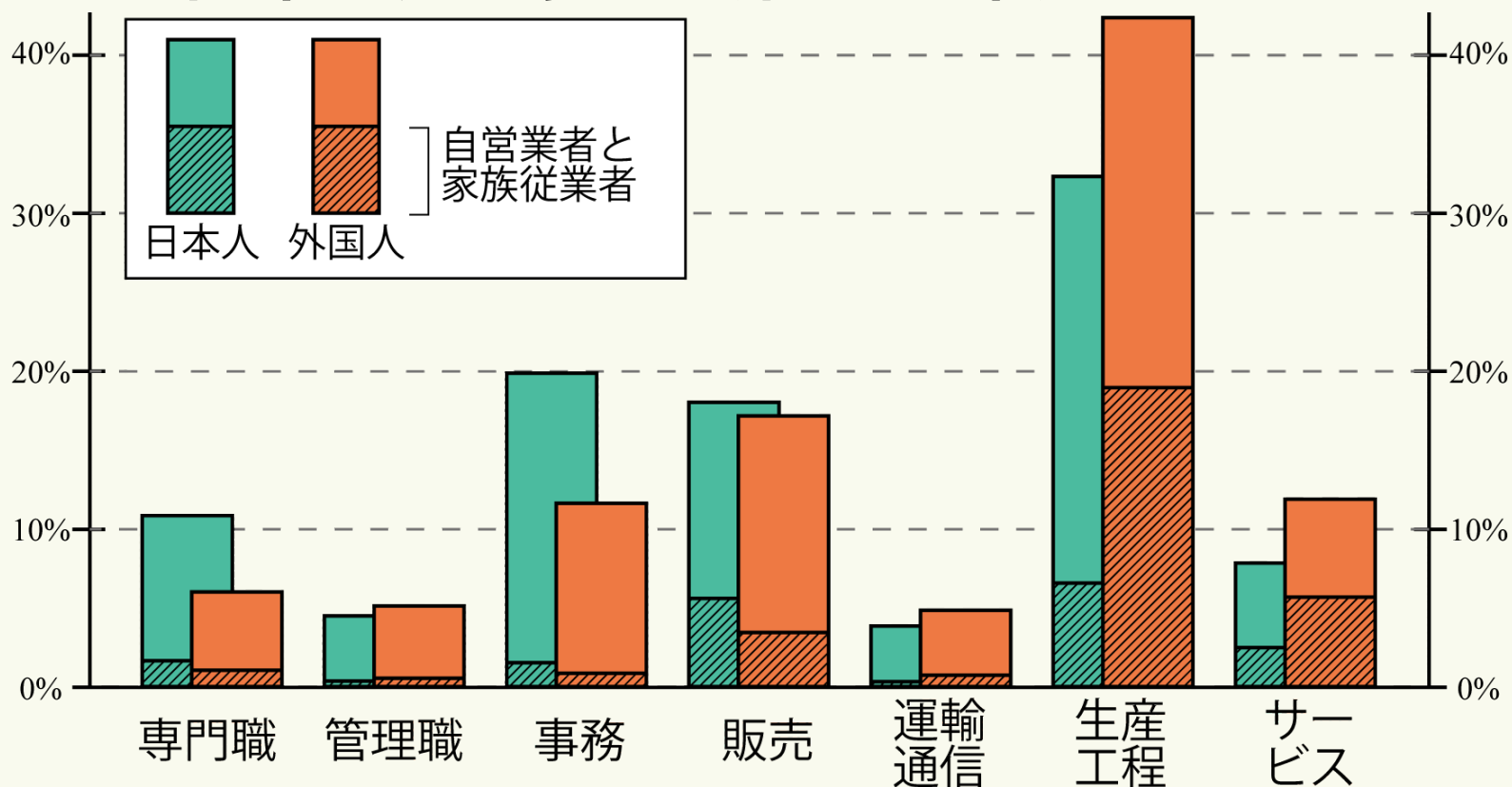


# 1980年前後の状況

## ▶ 日本人と比べ高い持ち家比率

▶ 63.7%が持ち家，公営は4.1% ←住宅差別

▶ 自営業者層の多さ（特に工業）



# 1950年～1980年頃の変化

---

- ▶ **生野区での在日コリアンの漸増**
    - ▶ 周辺地域からの流入
    - ▶ 持ち家の取得しやすさ  
(大地主の土地処分, 相対的に高い金額でも購入する人の存在) 谷編(2002)
  - ▶ 『在日韓国人企業名鑑』(1974)
  - ▶ 土地登記 (所有者の移転, 抵当権の情報)
-

# 登記情報(所有権)

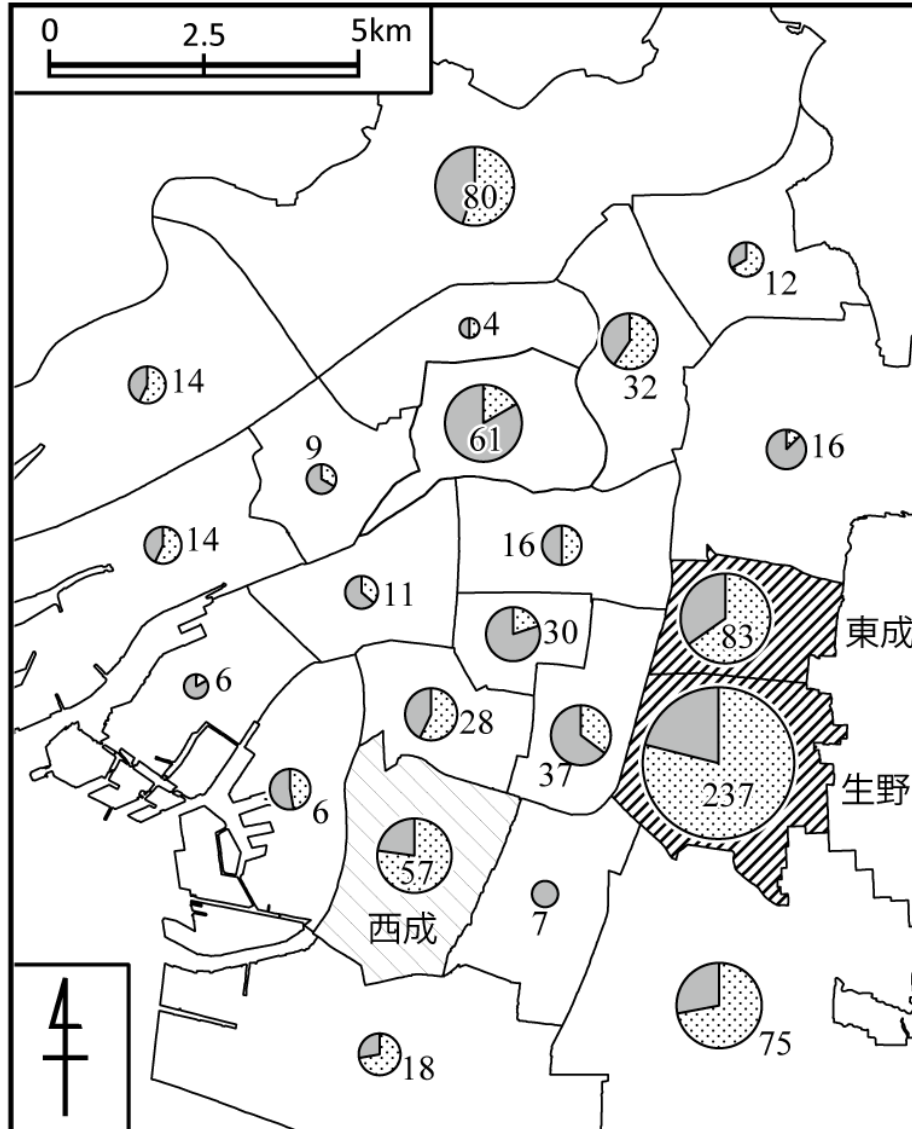
(権 有 所)		区 甲	
<p>八</p> <p>所有権移転</p> <p>昭和四八年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>原因 昭和四八年〇月〇日</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島〇丁</p>		<p>志</p> <p>事 項 欄</p> <p>順位 番号</p> <p>受付 昭和四拾四年拾月拾日</p> <p>才七〇七八八号</p> <p>原因 昭和四拾四年〇月〇日</p> <p>取 得 者</p> <p>大 蔵 省</p> <p>右分割により本番の地を登記</p> <p>記用紙順在才四番の登記を無効</p> <p>した</p> <p>昭和四拾五年四月五日</p> <p>才八〇八五五号</p>	
		<p>付記 番号</p> <p>住所 大阪生野区田島</p> <p>原因 昭和五六年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>	
<p>四</p> <p>所有権移転</p> <p>昭和五六年〇月〇日受付</p> <p>第九九号</p> <p>原因 同年〇月〇日</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>		<p>任 意</p> <p>事 項 欄</p> <p>順位 番号</p> <p>所有権移転</p> <p>昭和五五年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>原因 昭和五〇年〇月〇日</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>	
		<p>所有権移転</p> <p>昭和五五年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>原因 昭和五〇年〇月〇日</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>	
<p>住所 大阪生野区田島</p> <p>原因 昭和五六年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>		<p>所有権移転</p> <p>昭和五五年〇月〇日受付</p> <p>第〇〇〇〇号</p> <p>原因 昭和五〇年〇月〇日</p> <p>所有権 買</p> <p>目 大阪市生野区田島</p>	
		<p>順位 番号</p>	

# 登記情報(抵当権)

順位 番号	事項欄
順位 第五	<p>一 抵当権設定 昭和五十六年七月式五日受付 第九五〇号</p> <p>原因 昭和五十六年七月式〇日 金銭消費貸借同日設定 債権額 金壹千貳百万円 利息 年九・五〇% (この利率 の百分之の壹を月利、式分の 壹を半年利とします)</p> <p>損害金 年壹参・〇〇% (年六六五日割計算)</p> <p>債務者 大阪市生野区田島 目六番参号</p> <p>抵当権者 東京都中央区京橋 壹丁目九番壹号</p> <p>全国信用協同組合連合会 取次店 信用組合大阪商銀 平野支店</p> <p>共同担保目録第八番七号</p> <p>五番抵当権設定 昭和六十年七月式五日受付 第九〇八四六号</p> <p>原因 同日弁済</p>
順位 第五	<p>根抵当権設定 昭和六十年七月式五日受付 第九〇八四七号</p> <p>原因 同日設定</p> <p>債権額 金壹千八百万円</p> <p>債権の範囲 信用組合取引 手形債権 小切手債権 保証委託取引 保証取引</p> <p>債務者 大阪市生野区田島</p> <p>根抵当権者 大阪市北区曾根崎 式丁目八番五号</p> <p>信用組合大阪商銀 共同担保目録第九番七号九号</p> <p>五番根抵当権変更 昭和六十年六月式六日受付 第九〇八八九号</p> <p>原因 同月式五日変更</p> <p>債権額 金壹千万円</p>

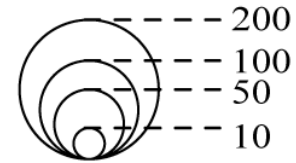


# 在日コリアン自営業者の空間的特徴

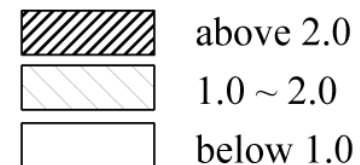


在日朝鮮人自営業者

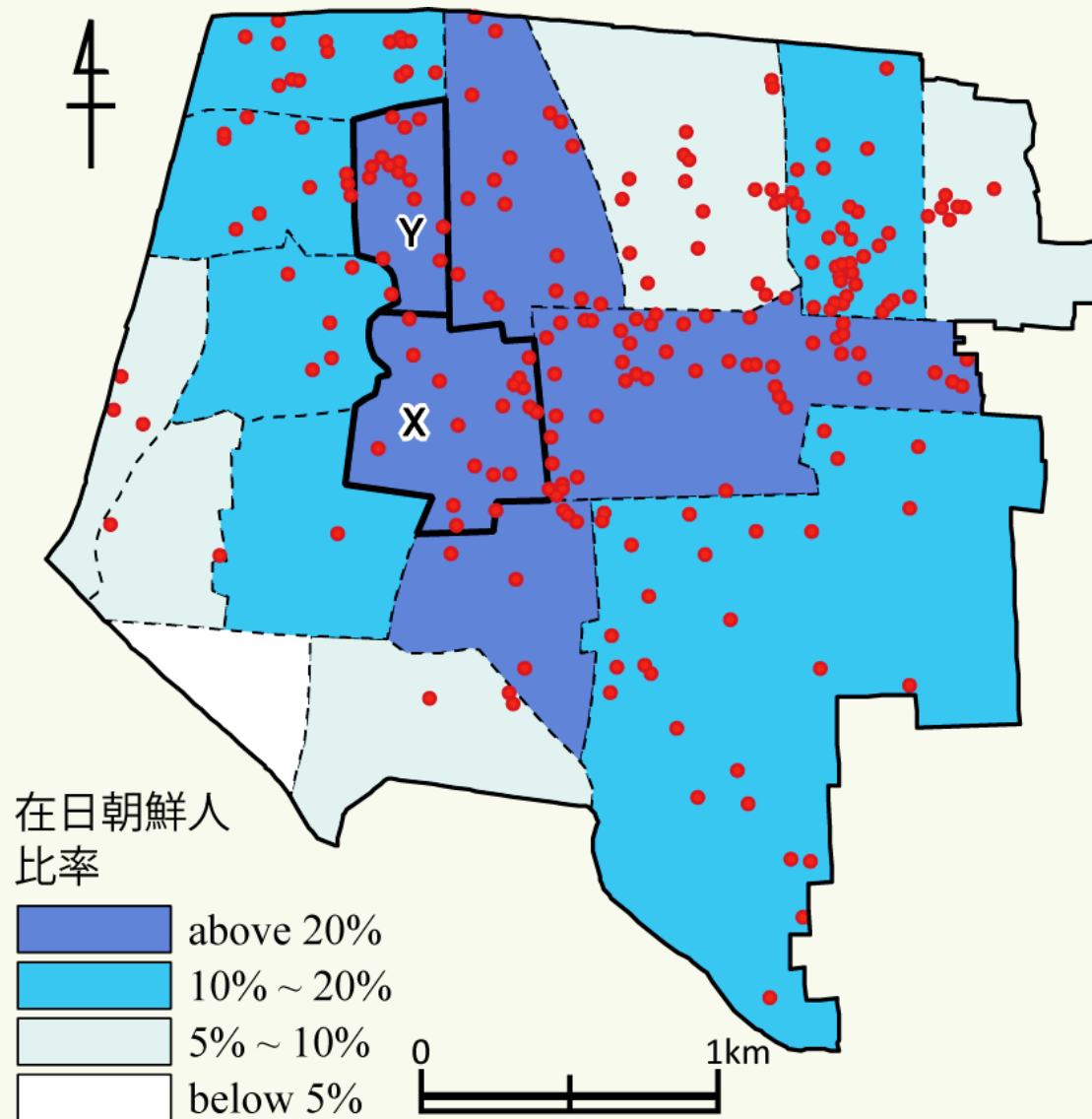
その他 製造業



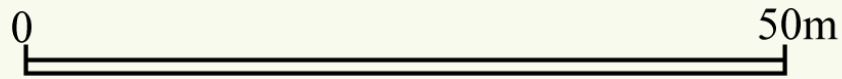
立地係数  
(1975年)



# 在日コリアン自営業者の空間的特徴

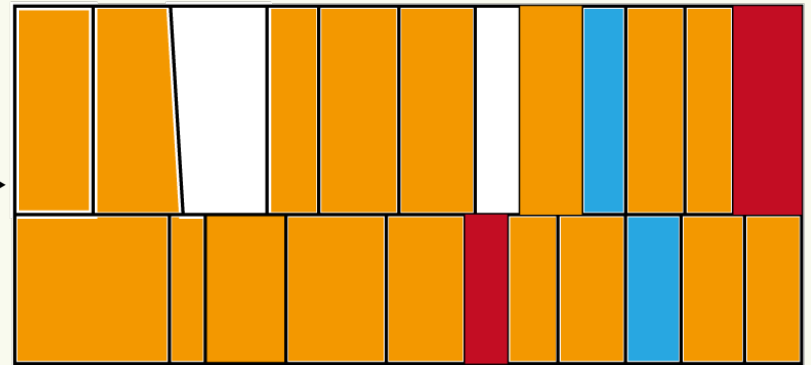
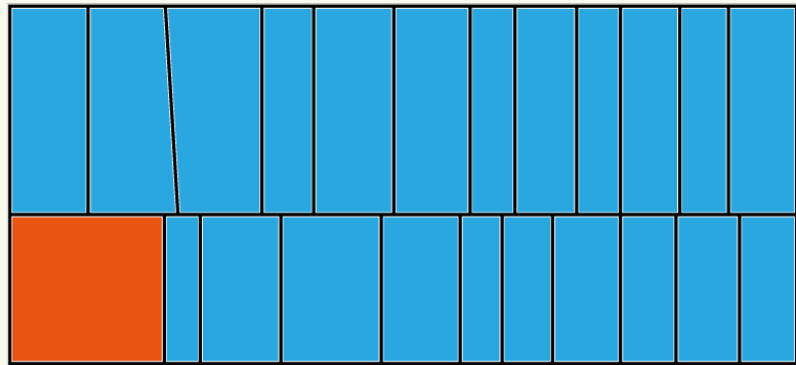


# 土地取得過程

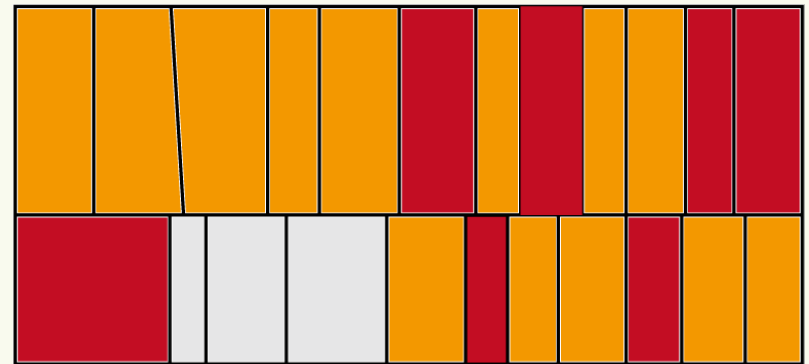



1960


1970

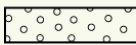



1980




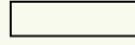
 大地主または大蔵省所有

 朝鮮人所有

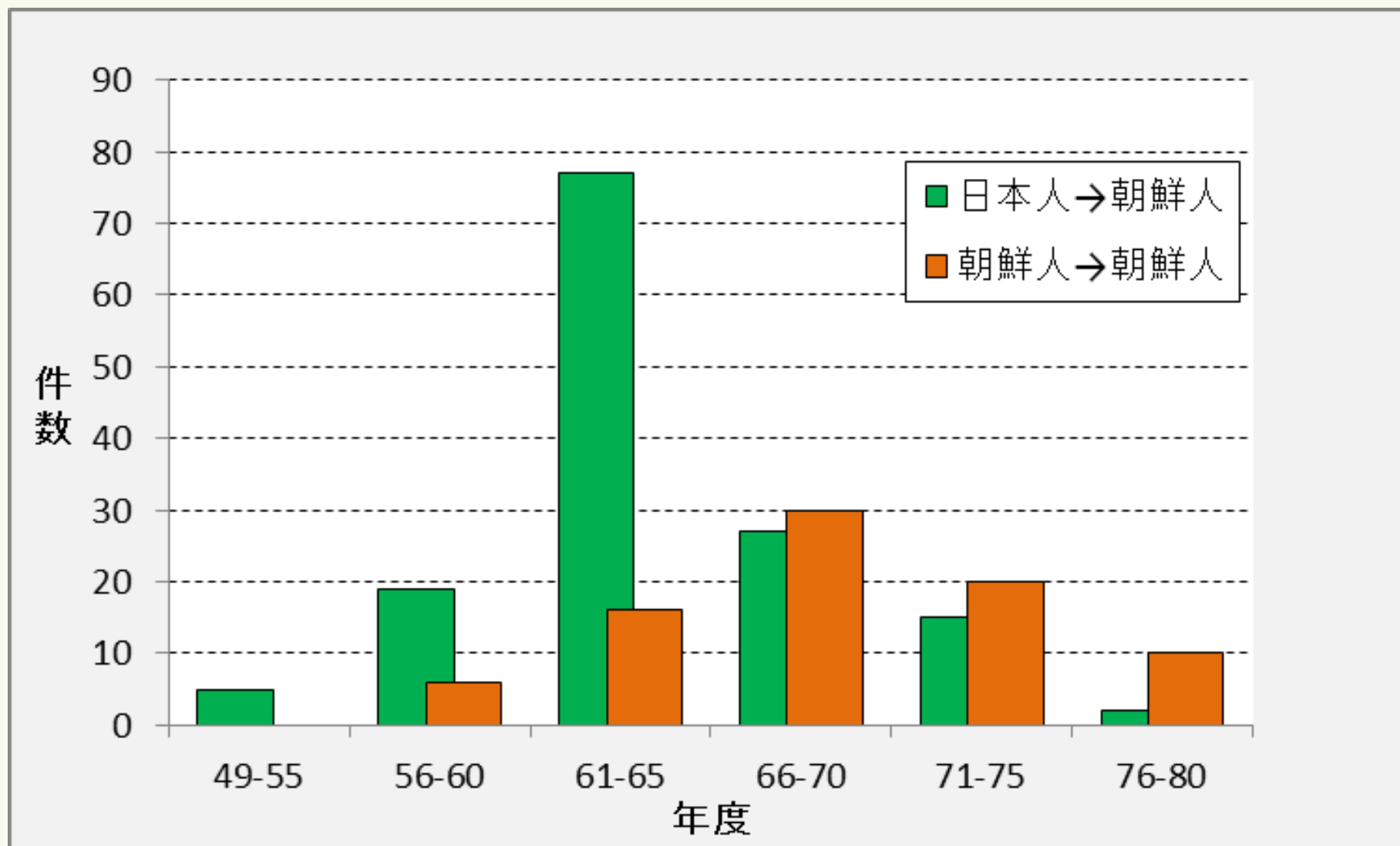
 日本人

 他の朝鮮人へ売却

 非居住者所有

 不明

# 土地取得過程

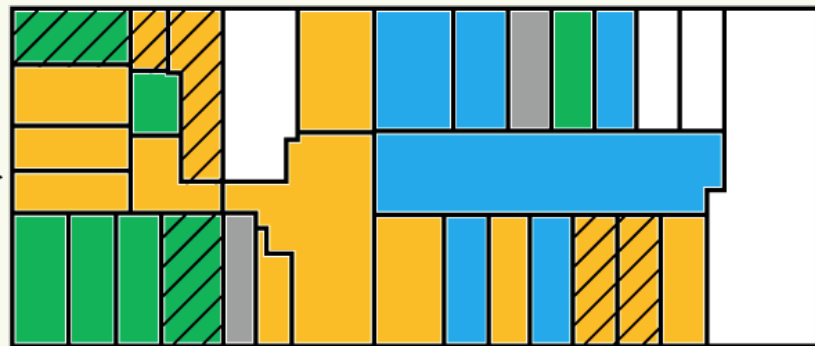
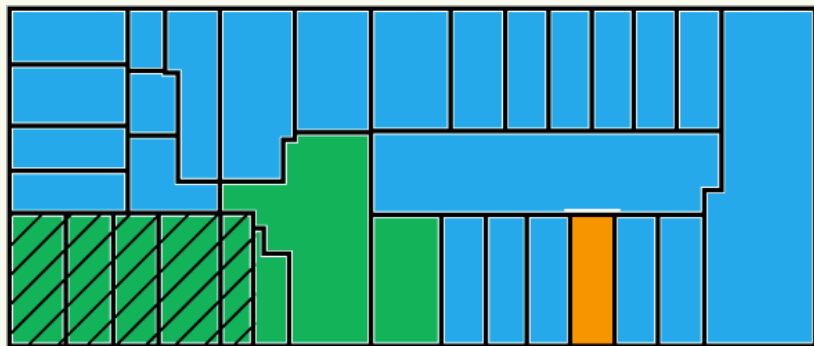


# 土地取得過程(非居住者の土地取得)

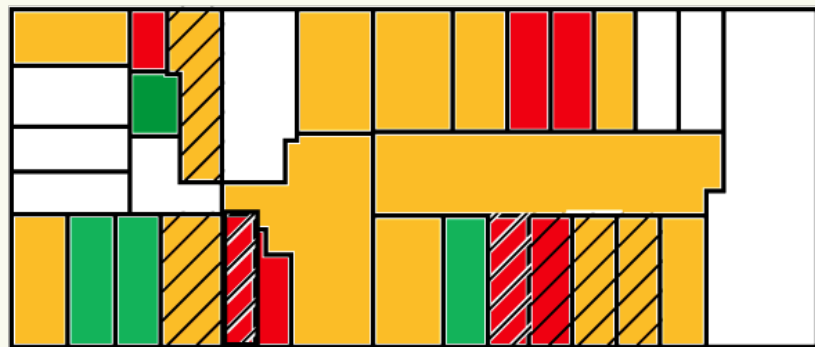
0 40m

1960

1965



1975



大地主または  
大蔵省所有

日本人

非居住者所有

朝鮮人所有

他の朝鮮人へ  
売却

不明

# 抵当権の情報

	エスニック資源		非エスニック資源			合計
	民族銀行	同胞(個人)	日本の銀行・信金	信用保証協会等	その他	
抵当権	15.3%	28.4%	35.4%	6.1%	14.7%	100.0%
根抵当権	21.5%	0.0%	61.5%	17.0%	0.0%	100.0%
合計	18.2%	15.0%	47.8%	11.2%	7.8%	100.0%



# 在日コリアン集住地区の存続

---

## ▶ 土地取得過程とその結果

- ▶ 1960年代，土地取得が急速に進む
- ▶ その背景：住宅差別，「居住」と「就業」の結合

## ▶ 抵当権に関する情報

- ▶ エスニック資源が果たした一定の役割
  - ▶ 日本の金融機関への依存度合も大きい
  - ▶ 土地＝ビジネス上の「資産」
-

# おわりに

---

- ▶ **明瞭な在日コリアン集住地区の存続**
    - ▶ **土地取得の進展**  
＝ネガティブ・ポジティブな要因
    - ▶ **必ずしも「在日」の閉じたコミュニティが存在してきたわけではない**  
(明瞭な空間的偏在  
≠エスニック資源・社会関係の優位性)
    - ▶ **都市政治—資本—集団関係という関連性の中で在日コリアン集住地区を考える必要性**
-



# 参考文献

---

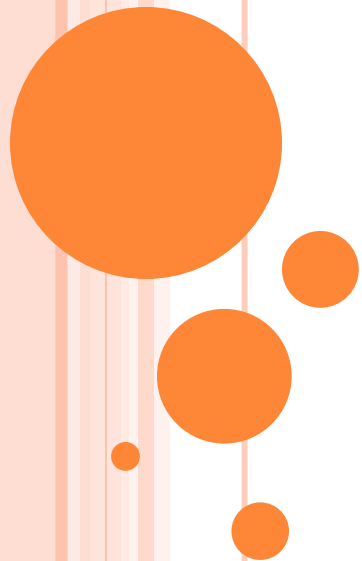
- ▶ 谷 富夫 編(2002)『民族関係における結合と分離』  
ミネルヴァ書房
  - ▶ 福本 拓(2004)「1920年代から1950年代初頭の大阪市における在  
日朝鮮人集住地の変遷」『人文地理』56巻4号, 42-57頁
  - ▶ 本岡拓哉(2007)「戦後神戸市における不法占拠バラック街の消滅  
過程とその背景」『人文地理』59巻2号, 20-40頁
  - ▶ Fukumoto, T. (2013) The persistence of the residential  
concentration of Koreans in Osaka from 1950 to 1980: its  
relation to land transfers and home-work relationship.  
*Japanese Journal of Human Geography*, 65-6 (In print)
-

東京大学現代韓国研究センター

2014年2月1日(東京大学)

# 在韓「在日コリアン」の日本語教師のライフストーリー —日本語教育における「言語」、「国籍」、「血統」—

田中里奈  
(山口福祉文化大学)



## 研究の背景

来日するニューカマーの増加 ➤ ➤ 滞在の長期化と定着



「日本語」を「母語」として身につけていく「非日本人」の増加

- 「在日コリアン」など「日本語」を「母語」とする人々は以前より存在
- 「単一民族神話」(小熊1995)は根強く維持されている状況



- 「日本語＝日本人」という思想(「日本語は日本人のものである」という考え方)の再考と解体が迫られている
- 特に、「日本語」によって「日本人化」を図ろうとした過去をもち、「日本語」を教えるという行為からは逃れられない日本語教育学においてこそ批判的検討が必要

## 「在日コリアン」教師への着目

### 「日本語＝日本人」という思想の問題

- 従来の研究: 言語学的に見て「正しくない日本語」を排除する思想や教育のあり方として問題化されてきた

⇒「日本語の話者」として「日本人」のみを想定してしまう思想そのもの、ある「言語」と特定の「国籍」と「血統」との結びつきを前提にし、そこに正統性を付与する思想に対する批判へと展開していく必要性があるのではないか？



- 「日本語」を「母語」として身につけてはいるが、国籍・血統的には「非日本人」である「在日コリアン」に着目
- 特に、「日本語＝日本人」という思想が根強い日本語教育に従事する「在日コリアン」の日本語教師に焦点化



## 研究目的

- 《「母語」とする「言語」が共有されている言語共同体》と《「国籍」/「血統」》が必ずしも一致しない、という属性をもつ「在日コリアン」教師に着目
- 「日本語＝日本人」という「単一民族国家」観が根強く、「日本人のような日本語を」といった目標が掲げられがちな日本語教育という空間において、「在日コリアン」教師が自己をどのように捉え、位置づけていくのか、また、周囲から位置づけられているのか？



- 《「母語」とする「言語」》と《「国籍」/「血統」》の関係性が日本語教育においてどのように捉えられ、扱われてきたのかを考察。



## 先行研究1-国民国家と「言語」

- 国民＝言語という思想の成立と流布：田中克彦(1981)や Anderson ([1983]1991 = 1997)
- 近代国家形成期に「日本語＝日本人」という思想が創出されたこと、さらに、「非日本人」の「日本人化」を試みた帝国主義体制下の日本語教育に引き継がれたこと(イ1996)
- 戦後の日本語教育においても「日本語＝日本人」という思想が根強いこと(牲川2012, 田中2006, 鄭2010)



問題化されてきたのは、「非日本人」を「日本人化」する論理やその媒介とされる「正しい日本語」の存在。  
「日本語のNS」だが「非日本人」といった、《「母語」とする「言語」》とそこから想定されうる《「国籍」/「血統」》のズレをもつ人々の存在は等閑視されてきたのでは？

## 先行研究2-「NS」/「NNS」概念の批判的検討

- NS/NNS概念の捉え方の変遷(Paikeday1985, 大平2001): 実体のないもの/研究者・研究領域により異なる。
- 近年では, NS = 標準, NNS = 逸脱といった二項対立的な関係性を前提とした批判ではなく, 「民族」や「人種」など様々な社会的文脈を踏まえた批判が模索されている(Kubota2009)。
- 日本語教育における議論では, NS教師 = 「日本人」, NNS教師 = 「非日本人」といった二項対立的図式が想定される。
- 言語学的観点から見たNS/NNSの関係性が所与のものとして設定。

➡ 二項対立的な図式を攪乱させる議論の方向性のためにも, 図式が根強く維持されている日本語教育に従事する, 二項対立的図式では捉えきれない「在日コリアン」教師を研究対象とすることに意義があるのではないか?

## 先行研究3-《「言語」》と《「国籍」/「血統」》のズレをもつ「在日コリアン」教師

- 「在日コリアン」のアイデンティティに関する先行研究  
: 本質主義的なidentityの捉え方⇒「カテゴリー」自体の批判  
(福岡1993, 金1999, 鄭暎恵2003など)
- 「在日コリアン」のアイデンティティと言語に関する先行研究  
: 「母語」「母国語」「国民」を等式で結ぶ「単一民族国家」観に起因する国語ナショナリズムに支配された韓国語と日本語(徐2010など)
- 「帰韓」した「在日コリアン」に関する先行研究  
: identityの変化など(권2008, 김2009, 韓2011など)

➡ 「帰韓」した「在日コリアン」研究はほとんどなく、「在日コリアン」教師に関する研究は皆無



## 在韓「在日コリアン」とは

- 統計資料からは正確な数が把握できない集団
    - ↑「永住帰国」している場合もあること、国籍も一様ではないこと、ビザの制限なしで長期滞在できること等
  - 参考・・・趙(2012):毎年1.2万人前後で推移
    - =「在外国民国内居所申告証」の申告者数
      - ・義務ではない
      - ・申告したまま出国できる場合もある
- 不可視化されてきた存在



## 研究方法および調査概要

■ ライフストーリー研究法 (桜井2002)

■ アクティヴ・インタビュー (Holstein & Gubrium 1995=2004)

■ 2009.9～2011.10に韓国にてLSインタビューを実施。

協力者:「在日コリアン」教師2世・7名, 3世・11名の計18名。

■ 1.5～5時間程度のインタビューを1名1～5回実施。

■ おおまかなインタビューのトピック:

- ① 韓国に「帰国」するまでの経緯と理由
- ② 日本語教育に携わるようになった経緯と理由
- ③ 日本語教育の経験と教育現場におけるポジショニング
- ④ 日本語・日本語を教えることへの意味づけ
- ⑤ 言語経験や言語意識, アイデンティティ



# 本研究の調査概要と記述

## ■ 本研究で取り上げる語り手たち

	性別	在日	出生年	特別 永住権	日本語 教育	現場で使用し ている氏名	調査回数
【事例1】 教師V	女性	2世	1948年	○→×	1979年～	本名のみ	5
【事例2】 教師L	男性	3世	1963年	○	1999年～	本名の姓 +通称名の名	3
【事例3】 教師E	女性	3世	1971年	○	2003年～	通称名のみ	2
【事例4】 教師D	女性	3世	1970年	○	1996年～	ほぼ通称名	2





「言語」と「国籍」/「血統」のズレ  
と教師たちの「戦略」



## 事例1－教師V(在日2世, 女性)

- 本名(韓国名)で日本語教育に従事
- 「在日コリアン」というカテゴリーを戦略的に利用している教師



## ■ 普段の実生活

- ・「在日コリアン」という「カテゴリー」が付与されることに否定的
- ・「カテゴリー」そのものに対して懐疑的な立場



## ■ 日本語教育の現場

- ・「在日コリアン」という「カテゴリー」を積極的に表明
  - ・韓国籍・韓国名であるため、「国籍」や「血統」という観点から「非日本人」と見なされる
- ・「日本語のNS」として十分な評価が得られにくい



■ 「日本語のNS」でも、日本国籍や日本名ではないため、正統なNSとして見なされないことに対する葛藤や困難

⇒ 「在日コリアン」という「カテゴリー」を「戦略」的に見せ、韓国名だが「正統な日本語のNSである」ことを表明し、日本語教育における自身の位置を確立

## 事例2－教師L(在日3世, 男性)

- ・[本名＋通称名]により日本語教育に従事している教師



■「本名の姓[김(キム)/金]」+「本名を日本語読みしたものをハングル表記した名(本名の名[실(シル)/実]ではなく,日本語読みした미노르(みのる)/実)」を使用

➡ 自分の【国籍は韓国】だが,【韓国系日本人】と名のる

■「韓国にも日本にもどちらにも完全には属したくない」というアイデンティティの表明→自身の属性や名前を「戦略」的に「利用」するという立場

・その背景には,「【ネイティブ先生】であるのに,そうではないと誤解されてしまうこと」を回避するという意図

・「【ネイティブ先生としての商品価値】を証明する」という意図

↔ 「日本語」が「日本人」によってのみ話されている言語ではないこと,「言語」の境界も,「国民」の境界も混沌としているものであること,そして,その関係も1対1で結びつくようなものではないといったことを学習者に提示したいと考える教師Lの教育理念の根幹とも密接に関係



## 事例3－教師E(在日3世, 女性)

- ・日本語教育の現場では[通称名]を, その他の場所では[本名]を用いている教師



- 日本では成人するまで通称名を名のり、出自を隠して生活。就職以後は本名を名のってきたが、韓国で日本語教育に携わるようになったのがきっかけで、通称名使用を再開。
- 日本語教育の現場では通称名を、その他の場所では本名を名のるといった二つの名前を完全に使い分ける生活



- ・教育機関側からの要請
  - ・「なぜ、日本語NSなのに韓国名?」、**「なぜ、日本語NSなのに非日本人?」**といった経歴に関する説明要求を回避
  - ・「日本語」という「言語資本」が最も評価される形態で自己を表明する必要性
- ➡ このような名前の使い分けによって、日本語教育という空間において「十全」な「日本人」を装うことができ、「日本人＝日本語NS」教師の位置を取ることに成功



## 事例4ー教師D(在日3世, 女性)

- ・日本ではほとんど通称名を使用してこなかったのに、韓国の日本語教育において通称名を使用しなければならない状況に立たされている教師



■教育機関側からの指示により、通称名を日本語教育の現場で使用し、「日本人教師＝日本語のネイティブ教師」として教師Dを見るように学習者を誘導

⇐学期中盤で「日本語のネイティブ」だが「韓国籍」であること、「在日コリアン」であることを【カミングアウト】し、自身を【完全な韓国人でもなく、日本人でもない】教師として位置づけ直す。

➤日本語教育を単なる「日本語」を教えるだけの営みとして捉えているわけではないため、「日本語話者＝日本人」ではなく、多様な人々によって日本語が共有されている現実を示すことを目指す。

➤雇用先から一方的に使用することを言い渡された通称名を「したたか」に「利用」することで、教師Dは日本語教育における独特な位置を確保

## 教師たちのライフストーリー分析から見えてきたこと①

いわゆる「正しい日本語」を話す日本語NSと呼ばれる人でも、「日本人ではないこと」により、「正統な日本語NS」から排除

- ➡ 「日本語のNS」内部のヒエラルキー
  - ・ 「日本語」の評価に話者の所属が大きく関わっていること
  - ・ 「日本人性」が付与された「日本語」の存在



日本語教育におけるある「言語」を「母語」として共有している言語共同体の主要な「国籍」/「血統」をもつことが重視される思想の存在



## 教師たちのライフストーリー分析から見えてきたこと②

### 「着せ替え」可能な実体のない「NS」という概念

- 例)・韓国名を用いているがゆえに「日本語のNS」であっても「日本語のNS」から排除され、そのことへの苦悩や困難を経験している教師
- ・対照的に、通称名を使用により、「正統な日本語NS」に「なる」ことができ、そうした苦悩や困難を回避している教師



- ・「日本語のNS」という概念そのものが、実は必ずしも「日本人」であることを前提に成立していない。
- ・「単一民族神話」を逆手にとった「なりすまし」ができれば、「日本語のNS」に「なる」ことができる。



- ・《「言語」》と《「国籍」/「血統」》の一体化は「戦略」的に打ち崩せる程度の脆弱な概念。
- ・《「言語」》と《「国籍」/「血統」》の一体化を兼ね備えていること＝「NS」という、実体のない表層的な“イメージ”が漠然と共有

## 教師たちのライフストーリー分析から見えてきたこと③

「雑種」な属性を「単一」のものへと塗り替えさせる圧力の強さ

- 「混沌」とした「雑種」な属性をもつ「在日コリアン」教師は、それを見せることで日本語教育におけるポジションが脅かされる経験を有している。





- 「単一性志向」の強制力の問題と常に隣り合わせの状況



• 「雑種」な属性をもつというだけの理由から、「国家」や「国民」を超越しうる存在だと無条件に「称賛」し、日本語教育に何らかの示唆を与えうると見なすことは、「単一性志向」が根強いからこそ直面している彼らの困難や葛藤を見えにくくしてしまう。

• 「雑種」な属性に着目するだけでなく、それによりもたらさる困難や葛藤を可視化させていくこと、困難や葛藤をもたらす構造の矛盾を明らかにすることが現状では重要。

## まとめ

- 言語教育・・・ことばによる他者との関係構築を支えていくことに主眼を置いた、本来的には、ある個人のなかでの「言語」の複数化を促していく機能をもつもの
- 
- にもかかわらず、ある「国籍」や「血統」をもつ者にその「言語」の「正統性」を付与するという「単一性志向」の問題を内包。
  - 国民国家形成に寄与してきた頃の「言語」の思想を内包したままの言語教育が現在でも継続して行われているからではないか。
  - そのことが、具体的な文脈を伴って可視化されたり、十分な批判に晒されたりしてこなかったという問題も大きい。
- ➡ 言語教育における「単一性志向」の問題を徹底的に可視化させ、批判のうねりを作り出すことが必要か？ 



# 主な参考文献1

イヨンスク,1996,『「国語」という思想—近代日本の言語認識』岩波書店.

大平未央子, 2001,「ネイティブスピーカー再考」『「正しさ」への問い—批判的  
社会言語学の試み』85-110,三元社.

小熊英二,1995,『単一民族神話の起源—<日本人>の自画像の系譜』新曜  
社.

韓榮惠, 2011,「在韓在日朝鮮人:本国との新しい関係—“朝鮮”から“韓国”  
に“国籍変更”した在日3世を中心に—」移民政策学会編『移民政策研究』  
3:123-139.

金泰泳, 1999,『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニ  
シティ』世界思想社.

桜井厚,2002,『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書  
房.

徐京植, 2010b,「母語と母国語の相克—在日朝鮮人の言語経験」『植民地  
主義の暴力』195-240, 高文研.

牲川波都季,2012,『戦後日本語教育学とナショナリズム—「思考様式言説」に  
見る包摂と差異化の論理—』くろしお出版.

## 主な参考文献2

田中克彦, 1981, 『ことばと国家』岩波書店.

田中里奈, 2006, 「戦後の日本語教育における思想的「連続性」の問題—日本語教科書に見る「国家」, 「国民」, 「言語」, 「文化」」『リテラシーズ』2:83-98, くろしお出版.

趙慶喜, 2012, 「在韓在日朝鮮人の現在—曖昧な「同胞」の承認に向けて—」『Impaction』185:152-161.

鄭京姫, 2010, 「「二分化された日本語」の問題—学習者が語る「日本語」の意味に注目して—」『WEB版リテラシーズ』7:1-10.

鄭暎恵, 2003, 『<民が代> 斉唱—アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.

福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ』中公新書.

Anderson, Benedict, [1983] 1991, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (Revised Edition)*, London: Verso. (= 1997, 白石さや・白石隆訳, 『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.)

## 主な参考文献3

Kubota, Ryuko, 2009, Rethinking the superiority of the native speaker: Toward a relational understanding of power. In Doerr Neriko Musha (ed.), *The Native Speaker Concept: Ethnographic Investigations of Native Speaker Effects*, 233–248, Mouton De Gruyter.

Paikeday, T. M., 1985, *The Native Speaker is Dead!*, Tront: Lexicography. (= 1990, 松本安弘・松本アイリン訳, 『ネイティブスピーカーとは誰のこと?』丸善出版.)

권숙인, 2008, 「디아스포라 재일한인의 ‘귀환’: 한국사회에서의 경험과 정체성」 서울대학교국제학연구소  
『국제·지역연구』17(4): 33–60.

김예림, 2009, 「이동하는 국적, 월경하는 주체, 경계적 문화자본— 한국내 재일조선인 3세의 정체성 정치와 문화실천 상허학회」  
『상허학보』25: 349–386.



■本研究は、平成24～26年度科学研究費補助金（若手研究B）[課題名：「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリー研究」、課題番号:24720245、研究代表者:田中里奈]の交付を受けて行われた研究成果の一部です。

